「灰色のにわとり」

にした「灰色のにわとり」、「山並みの上高く」、アーノルド・ボークリンの絵「死者の島」をもとにした「十九世紀の絵画に関するリトル・ファンタジー」、簡単に「ファンタジー」と名づけられた超現実主義（シュールレアリスム）の作品などが上げられる。

壁に一枚の画用紙をとめ、パステルとチョークでそこに絵を描いていき、その刻々の変化を写真にとる、そして三週間後には、描き古されたその画用紙と、カメラに収められた四百フィートのフィルムが残る。大画家の作品にもとづいて作られた映画とくらべて、このような〝パステル〟作品は、静止した絵を写真にとったことをつゆほども感じさせない。見る者は、まるで絶えず変化していく微妙な美の世界、詩的イマジネーションのファンタスティックな夢の国を徘徊しているように錯覚し、美の只中に横たわる平和を孤独に探し求める魂の、つかの間の遍歴を感じるのである。

こうした作品は、「集中的な狂気」の中で創造された。NFBの仕事をしながらオタワで暮した最初の十年間というものは、朝の四時に帰宅して、同じ朝の十一時までには再び仕事にかかり、そのまま一日十五時間の活動に入るということがしょっちゅうだった。「私は、制作のこの段階に入ると、食べて寝る以外のことは何もしない」と彼は言う。

マクラレンの即興的な方法は、手作りのフィルムには理想的に思われるが、彼がその手法を生きた動きを撮った映画でも用いていることには驚かされる。彼の作品中、最も広く上映されている「隣人」は、断続的映写技法をテストした際にひらめいたものだ、「テストの過程で、われわれは二人の男にけんかさせたら面白かろうと思いました。われわれが撮影したこのワンショットを見て、私はこれこそ映画だ、と思った。」

その瞬間、マクラレンは過去二年間にわたって彼をとらえていた〝すさまじい緊張〟から解放され、光明がみえたのだった。一九五〇年にNFBに戻る前の一年間、彼はユネスコの求めに応じて、中国東部で民衆に保健衛生の基本を教えるための、経費のかからない手描きの映画制作法を芸術家たちに教えていた。その間に、彼が働いていた村は国民党から共産軍の手に落ちた。その頃、朝鮮でも戦争が勃発していた。昔、彼が赤十字の求めに応じてスペイン市民戦争でカメラマンとして行動したとき最初に感じた戦争に直面した際の失望の念が、再びよみがえった。彼は言う――「私は、戦争がどんなに無益なものか言うために、何かをしたいと思った。でもどうしてよいかわからなかった。」そして、あの〝けんか〟のテストに行き当たったのである。

これをもとに、一本の花の所有をめぐって争い、互いの家も、妻子も、そして最後には互いの身をも破壊してしまう二人の隣人の単純かつ強烈な物語が、即興で作られたのである。（この制作過程で、彼はもうひとつの偉大な作品「椅子と青年」の核心を見つけた。隣人役のひとりが、布と木でできた旧式の折りたたみ椅子を苦心してひろげようとしているのを見て、人と椅子の関係を扱った映画をつくるという考えがひらめいたのだった。）余談だが、「隣人」は、暴力の結果を示すという実践的な用途のゆえに、マクラレンが制作したことを最も誇りに思っている作品である。

彼は空間にも強く魅かれている。この傾向は彼の作品に非常にはっきり出ているが、このため突拍子もないわき道へそれることがよくある。彼は四次元の家や庭を描いて（想像の中で）そこを駆けまわったり、四次元のテニスコートを描いたりした。また、眺めて楽しむため、四次元や五次元の立方体のモビールも作ったことがある。

マクラレンは、アニメーション映画の弱点は、悲劇を表現することができないことだと述べている。だが彼の作品に悲劇の特質を見る人は多い。争いを避けようとして喜劇を用いるそのやり方に、また「ファンタジー」や「C'est l'aviron」のような作品の美しさの背後にかくされた恐怖の中に、そして孤独な空間の詮索に、悲劇的なものを感じるのはなぜなのだろうか。「私にとって、空間は動的な経験である」と彼は言っているが、その作品を見ていると、しばしば、意志に反してあの偉大な無限の空間にひき込まれていくような感じをうけるのである。彼の登場人物の抗争は、アメリカ製の漫画の常套手段のようなけんかには決して終わらない。危機的時点になると、彼らの攻撃はメタモルフォーゼによって自分自身に向けられる。おそらく、マクラレンは自分自身の攻撃的傾向を自分に向けるからなのであろう。「隣人」は、この点に対する意義深い例外作品である。この作品では、暴力があまりに強烈なので、イタリアの配給元もアメリカの配給元も、何とか改編できないかと頼んだほどである。

マクラレンは実に複雑であり、彼と何十年も一緒に仕事をした人々でも、自分たちは彼を理解していない、と率直に語っている。マクラレン映画の象徴主義（シンボリズム）は、精神分析学的な解釈には豊かな課題を提供している。ある作家をして、彼は〝聖者〟だ、と言わしめたその博愛主義は、あどけない子供のような、愛するためと同時に愛されるためにも手を差しのべる人のそれである。マクラレンは、学生みたいな服装をし、六十三歳という実際の年より二十は若く見える。そして外見だけではなく、偉大な芸術家には共通の、若々しい無邪気さと情熱を常に失わない。もしも彼が映画作りをやめるなどと言い出したとしても、真面目に受けとれるどころか、映画作りのない彼の生活など、考えただけでも身振いがするであろう。たとえ周囲の人間がびっくりするほど精神的肉体的にまいっているときでさえ、マクラレンは必然にかられて仕事をするような男なのである。

（「カナディアン・アート」誌より転載）